

國學院大學 経済学部

基礎演習：授業評価アンケートの分析

令和7年度 FA活動報告

経済学部FA（9期） 奥山 怜央

令和7年度FA活動報告

基礎演習 授業評価アンケートの分析

國學院大學 経済学部FA(9期)

奥山 恼央

要旨

本報告書は、2025年度後期の「基礎演習B」授業評価アンケート結果を分析し、現状と課題を整理したものである。調査の結果、FA（学生アシスタント）の貢献や実社会と連携した課題解決型学習（PBL）への評価は極めて高く、多くの学生が主体性や協働力を実感している。しかし前期と比較すると、難易度上昇に伴いグループワークの円滑さや学部への帰属意識のスコアは低下傾向に見られた。特に「積極性」に関しては、プロジェクトを通じてV字回復した層と、大学生活への「慣れ」から意欲が継続的に低下した層への二極化が顕著であった。今後の改善策として、生活習慣の乱れやマンネリを打破する適度な緊張感の創出、身近な関心を専門的な経済学の分析へ橋渡しする指導法の強化などが必要であると提言している。

調査目的と概要	2
調査目的	2
調査概要	3
分析結果	3
Section.1：基礎演習Bへの満足度・学習効果	3
Section.2：基礎演習Aにおいて満足できた項目	6
Section.3：働きかけ主体とクラスの雰囲気	9
Section.4：グループワークへの満足度	9
Section.5：課題解決型学習 テーマへの評価	11
Section.6：授業準備時間	14
Section.7：積極性スコア	15
Section.8：社会人基礎力との授業関連度	19
Section.9：FAの授業への貢献	20
Section.10：自由記述	22
今後に向けて	26
本授業評価アンケートプロジェクトの改善	26
基礎演習A・B授業の改善の観点から	28
謝辞	28

調査目的と概要

調査目的

本報告書は、2025年度後期に実施した「基礎演習B」の授業アンケート結果を中心に分析し、基礎演習の授業環境、並びに経済学部1年生を取り巻く現状と課題を明確にすることを目的としている。

学部1年生の初年次教育として位置づけられる本科目は、前期の「基礎演習A」から継続して履修するカリキュラムとなっている。そのため本稿では、前期のアンケート結果との比較分析も適宜行った。ここで得

られた知見は、今後の授業並びにFA¹活動の改善において活用する。

調査概要²

調査対象	國學院大學経済学部において基礎演習Bを受講している全学生
対象科目	2025年度後期に開講された基礎演習B 全クラス
調査期間	2026年1月14日（水）～2026年1月20日（火） 14回授業時に実施しているため、各クラスによって前後する
調査方法	Googleフォームを用いた自記式質問紙による Web 調査
調査項目	基礎演習B受講後の満足度、グループワークへの評価、積極性の変化 他
回収状況	有効回答数：469件

アンケートの構成

「基礎演習A」の授業評価アンケートを元として設計した「基礎演習B」の授業評価アンケートは、合計50項目からなる選択式と自由記述形式の2つからなる。

単一回答、複数回答（チェックボックス）、SD法（6段階）、自由回答を除いた項目は、「次の点についてどのように思いますか。各項目で該当するものを1つずつ選択してください」という質問であり、各質問において、リッカート形式の4段階評価（4=とてもそう思う、3=ややそう思う、2=あまりそう思わない、1=まったくそう思わない）で回答を求めた。

分析結果

Section.1：基礎演習Bへの満足度・学習効果

以下は、「基礎演習を履修して、次の点についてどのように思いますか。各項目で該当するものを1つずつ選択してください。」という設問への回答を集計したものである。前期の「基礎演習A」との比較のため、各項目の平均値³およびWelchのt検定による有意差についても併記した。5%水準で有意な差があり、平均

¹ FA：基礎演習Aの授業において、グループワークの円滑な推進をはじめとするアクティブラーニングの効果的な実施に向けて全クラスに配置される、学生ファシリテイター＆アドバイザー。

² なお、本稿で比較している基礎演習Aの調査概要は以下の通りである。調査期間：2025年7月17日（木）～2025年7月23日（水）（14回授業時に実施しているため、各クラスによって前後する）。有効回答数：409件。

³ 平均値は4=とてもそう思う、3=ややそう思う、2=あまりそう思わない、1=まったくそう思わないの合計値を回答数で除す形で算出している。

値が大きかった項目の背景を着色している。

設問	まったく そう 思わない	あまり そう 思わない	やや そう思う	とても そう思う	基礎演習 B 平均値	基礎演習 A 平均値	有意差
毎回の授業で学びや気づきがあった	0.21%	2.35%	34.19%	63.25%	3.60	3.67	p < 0.05
毎回の授業に出席するのが楽しみ だった	1.92%	14.10%	41.88%	42.09%	3.24	3.42	p < 0.001
クラスの友達ができた	1.07%	8.33%	26.71%	63.89%	3.53	3.70	p < 0.001
クラスの雰囲気がよかったです	0.43%	6.40%	35.18%	58.00%	3.51	3.69	p < 0.001
私は教員・FAとコミュニケーション をとった	0.85%	4.90%	38.17%	56.08%	3.49	n/a ⁴	n/a
基礎演習Bの授業に満足している	0.43%	3.84%	36.46%	59.28%	3.55	3.70	p < 0.001
大学が好きになった	2.56%	17.91%	47.12%	32.41%	3.09	3.27	p < 0.001
経済学部が好きになった	2.77%	19.19%	49.47%	28.57%	3.04	3.19	p < 0.01
クラスの他の人の前で発言できるよ うになった	2.35%	12.79%	48.61%	36.25%	3.19	3.31	p < 0.05
経済や経営に関するメディア報道を 意識するようになった	2.99%	25.85%	44.02%	27.14%	2.95	3.02	n.s. (0.224)
クラスの他の人の発表や意見が参考 になった	0.43%	4.26%	38.38%	56.93%	3.52	3.64	p < 0.01
勉強する意欲がわいた	2.99%	22.01%	48.50%	26.50%	2.99	2.99	n.s. (0.887)
物事に対する積極性が増した	1.92%	13.86%	47.12%	37.10%	3.19	3.25	n.s. (0.233)
自分の能力について考えるようにな った	1.07%	7.89%	43.07%	47.97%	3.38	3.39	n.s.

⁴ 後期から新たに追加した質問で、前期に同等の質問がなく比較できないものはn/aと記載している。

なった							(0.752)
大学生活に満足している	1.07%	11.30%	46.48%	41.15%	3.28	n/a	n/a
2年生の「専門演習(ゼミ)」に応募してみたくなった	1.07%	9.19%	36.75%	52.99%	3.42	3.26	p < 0.01
FAがクラスにいてくれてよかった	0.64%	1.07%	16.03%	82.26%	3.80	3.84	n.s. (0.182)

授業内容とFAへの継続的な高い満足度

- FAの極めて高い貢献度：**「FAがクラスにいてくれてよかった」という項目は、同意度⁵が98.3%に達しており、前期（99.0%）に引き続き極めて高い評価を維持している。平均値（3.80）においても前期との有意な差は見られず（n.s.），通年を通してFAが学生の精神的・学習的支柱となっていることが確認できる。
- 授業全体の満足度：**「基礎演習Bの授業に満足している」への同意度は95.7%であり、高い水準にある。ただし、平均値は前期（3.70）から後期（3.55）にかけて統計的に有意な低下（p<0.001）が見られるため、基礎演習Bのコンテンツへの満足度が影響しているのか、後述の大学への姿勢が影響したものか、見極めが必要である。

学習効果と専門課程への意欲向上

- 専門演習（ゼミ）への関心の高まり：**特筆すべきは、「2年生の『専門演習(ゼミ)』に応募してみたくなった」という項目である。平均値が3.26（前期）から3.42（後期）へと有意に上昇しており（p<0.01），前期の課題として挙げられていた「専門分野への興味・関心の引き出し」が、後期のカリキュラムを通じて改善されたことを示している。
- 他者からの学びの継続：**「クラスの他の人の発表や意見が参考になった」の同意度は95.3%と依然として高く、グループワークを主体とした授業形態が、他者との相互作用を通じた学びの実感に寄与している。

帰属意識と学習意欲における課題

- 所属意識・雰囲気評価の低下傾向：**「大学が好きになった」「経済学部が好きになった」「クラスの雰囲気がよかったです」といった情意面の項目において、平均値がいずれも前期より有意に低下している。
- 学習意欲の伸び悩み：**「勉強する意欲がわいた」の平均値は2.99であり、前期と全く同数値（n.s.）

⁵ 「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計割合

であった。依然として「勉強する意欲がわいた」の同意度は75.0%と全項目の中で相対的に低く、学生の自発的な学習動機をいかに喚起し続けるかが、引き続き大きな課題である。

設問項目における共通因子の特定

本セクションでは17の設問項目から、基礎演習Bの満足度・学習効果を確認している。これらの項目から共通因子を探索するために因子分析を実施した。カイザー・ガットマン基準により、因子数を3と設定し、バリマックス回転により、因子負荷量行列・因子寄与率を求めた結果が以下の表である。

	クラス適応と 授業満足感	主体的学習意欲と 自己成長	大学・学部への 帰属意識
因子寄与率	0.218	0.19	0.134
累積因子寄与率	0.218	0.407	0.541
基礎演習Bの授業に満足している	0.756	0.198	0.33
クラスの雰囲気がよかったです	0.662	0.153	0.334
私は教員・FAとコミュニケーションをとった	0.623	0.275	0.261
FAがクラスにいてくれてよかったです	0.623	0.214	0.061
毎回の授業で学びや気づきがあった	0.616	0.347	0.071
毎回の授業に出席するのが楽しみだった	0.55	0.289	0.407
クラスの友達ができた	0.539	0.176	0.324
物事に対する積極性が増した	0.307	0.744	0.279
勉強する意欲がわいた	0.186	0.682	0.327
経済や経営に関するメディア報道を意識するようになった	0.148	0.624	0.22
自分の能力について考えるようになった	0.354	0.57	0.091
クラスの他の人の前で発言できるようになった	0.301	0.468	0.308

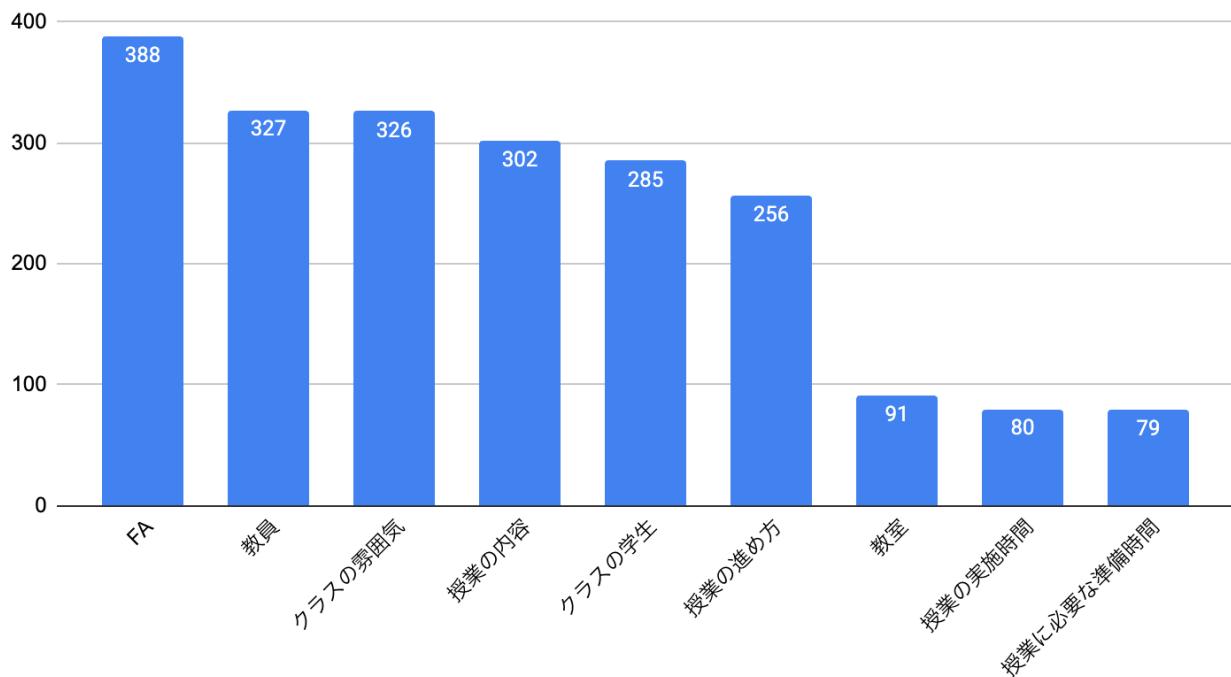
大学が好きになった	0.37	0.365	0.732
経済学部が好きになった	0.248	0.492	0.689
大学生活に満足している	0.317	0.384	0.467

- 第1因子「クラス適応と授業満足感」：この因子は、「基礎演習Bの授業に満足している」「クラスの雰囲気がよかったです」「私は教員・FAとコミュニケーションをとった」といった項目で高い数値を示している。これは、授業内容そのものだけでなく、クラスという「場」への適応や、FA・教員・友人との良好な人間関係が、授業への満足感を形成する主要因であることを示している。前期（基礎演習A）同様、学習環境の質が満足度に直結していると言える。
- 第2因子「主体的学習意欲と自己成長」：「物事に対する積極性が増した」「勉強する意欲がわいた」「経済や経営に関するメディア報道を意識するようになった」といった項目がこの因子に集中している。これは、授業が学生の内面的な学習動機を刺激し、コンピテンシー（行動特性）の変容や自己成長の実感につながっていることを示している。受動的な満足ではなく、能動的な学習姿勢の変化を表す因子である。
- 第3因子「大学・学部への帰属意識」：この因子は、「大学が好きになった」「経済学部が好きになった」という項目で極めて高い数値を示している。第1因子が「クラス（ミクロな場）」への満足を示していたのに対し、この因子は「大学・学部（マクロな組織）」への愛着や帰属意識を反映している。授業での経験が、より大きな組織への肯定感の醸成に寄与しているかどうかが、別個の次元として抽出された点が特徴的である。

Section.2：基礎演習Aにおいて満足できた項目

以下は「基礎演習Bに満足できた点について、該当するものをすべて選択してください（複数回答可）」との設問にて得られた回答を集計したものである。

基礎演習Bにおいて満足できた項目



基礎演習における満足項目

- **FAへの圧倒的な信頼**：前期の80.4%（329/409名）を上回る82.7%の学生がFAを満足項目に挙げた。後期の「基礎演習B」は、より高度な課題解決型学習やグループワークが中心となるため、学生の活動を伴走支援するFAの役割が、前期以上に高く評価された結果といえる。
- 「**ソフト面**」の安定した満足度：「教員」(69.7%)、「クラスの雰囲気」(69.5%)、「授業の内容」(64.4%)といったソフト面（人的・内容的要素）への満足度は、いずれも高い水準を維持している。特に「クラスの雰囲気」に関しては高い数値を得ていることからは、後期の複雑なグループワークを円滑に進めるための良好な土壌が形成されていたことが伺える。
- 「**ハード面**」の改善傾向と課題：物理的・時間的制約に関する項目は依然として低い水準にあるが、「授業の実施時間」への満足度は、前期の7%から17.1%へと約10ポイント改善した。前期報告書で指摘されていた「1限開講による負担」が、後期の開講スケジュールや学生の生活習慣化によって、相対的に緩和された可能性がある。一方で、「教室」(19.4%)や「授業に必要な準備時間」(16.8%)への満足度は依然として低く、グループワークに適した机配置の確保や、授業外学習の負担軽減については、次年度に向けた改善余地として残されている。

授業満足度との関係性

セクション2で回答してもらった「基礎演習Bにおいて満足できた項目」を説明変数、セクション1で4段階で回答してもらった「基礎演習Bの授業に満足している」を目的変数として、最小二乗法による重回帰分析を行った結果を下に示す。

授業満足度と各項目満足度の重回帰分析：統計量

項目	寄与度（係数）	p値	有意差
クラスの雰囲気	0.2922	0	p<0.05
教員	0.2585	0	p<0.05
クラスの学生	0.1657	0.004	p<0.05
授業の内容	0.0937	0.094	n.s.
授業の進め方	0.0663	0.241	n.s.
授業に必要な準備時間	0.0477	0.619	n.s.
FA	0.042	0.58	n.s.
教室	0.0189	0.825	n.s.
授業の実施時間	-0.0008	0.992	n.s.
大プロジェクト	-0.0127	0.981	n.s.

分析の結果、「クラスの雰囲気」、「教員」、「クラスの学生」の3項目において、5%水準における有意差が検出された。

- 「**クラスの雰囲気**」が最大の規定要因：前期（基礎演習A）では「教員」の寄与度が最も高かったのに対し、後期（基礎演習B）では「クラスの雰囲気」が最も高い寄与度（約29%）を示した。これは、後期の授業がより高度なグループワークや課題解決型学習に重点を置いていたため、学習環境としてのクラスの状態が学生の満足度を左右する最大の要因となったことを示唆している。
- 「**教員**」と「**クラスの学生**」の重要性：「教員」についても寄与度が約26%と高く、前期同様に重要な要素であることが再確認された。また、「クラスの学生」も有意な影響を与えており、他学生との相互作用が学びの満足感に直結している。
- FAの評価構造：「FA」単体では満足度への有意な直接影響は見られなかった。しかし、前述の「クラスの雰囲気」の形成にFAが大きく貢献しているという前期の分析結果を踏まえると、FAは雰囲気作りを通して間接的に満足度を高める役割を果たしていると考えられる。
- その他の項目：「授業の内容」については $p = 0.094$ と、有意傾向にはあるものの5%水準には達しない。

なかった。また、「授業の実施時間」や「教室」といったハード面の項目、および「大プロジェクト」の有無自体は、授業そのものの総合満足度を直接的に左右する主因とはなっていない。

Section.3：働きかけ主体とクラスの雰囲気

基礎演習Bの授業における働きかけの主体と、クラスの雰囲気をSD法で確認した。

授業における働きかけの主体

「基礎演習Bの授業における、教員とFAの働きかけの割合で最も近いものを選択してください。」という設問に対して、「教員主体：FA主体」のうち6段階で回答を求めた。

	教員主体					FA主体
基礎演習Bの授業における、教員とFAの働きかけの割合で最も近いものを選択してください。	0.43%	3.41%	19.62%	35.18%	32.20%	9.17%

この結果に対して、セクション1で4段階で回答してもらった「基礎演習Bの授業に満足している」との相関係数を導出したところ、相関係数0.016と無相関であった。

クラスの雰囲気

「クラスのテンションで最も近いものを選択してください」という設問に対して「静か：活気がある」のうち6段階で回答を求めた。

	静か					活気がある
クラスのテンションで最も近いものを選択してください	1.07%	9.17%	20.47%	35.61%	20.47%	13.22%

この結果に対して、セクション1で4段階で回答してもらった「基礎演習Bの授業に満足している」との相関係数を導出したところ、相関係数0.269と弱い相関が見られた。クラスの活気がグループワーク主体の基礎演習Bにおいて、コミュニケーションの取りやすさといった要因を介して、相関を生んでいるものと考えられる。

Section.4：グループワークへの満足度

以下は、「基礎演習を履修して、次の点についてどのように思いますか。各項目で該当するものを1つず

つ選択してください。」という設問への回答を集計したものである。前期の「基礎演習A」との比較のため、各項目の平均値およびWelchのt検定による有意差についても併記した。5%水準で有意な差があり、平均値が大きかった項目の背景を着色している。

	まったく そう 思わない	あまり そう 思わない	やや そう思う	とても そう思う	基礎演習 B 平均値	基礎演習 A 平均値	有意水準
グループ内の役割分担は適切だった	1.71%	7.92%	51.61%	38.76%	3.27	3.42	p < 0.001
グループ内で円滑なコミュニケーションがとれた	0.43%	6.84%	48.93%	43.80%	3.36	3.48	p < 0.01
他のメンバーの意見から、新たな気づきや学びを得られた	0.21%	4.91%	37.61%	57.26%	3.52	3.63	p < 0.01
課題解決に向けて、グループで協力して計画的に取り組むことができた	0.86%	6.65%	46.57%	45.92%	3.38	3.49	p < 0.05
プロジェクト活動を通じて、主体的に問題解決に取り組む力がついたと感じる	0.00%	2.78%	47.32%	49.89%	3.47	3.49 (0.643)	n.s.
授業でのグループワーク・課題解決型学習に満足している	0.21%	4.07%	44.11%	51.61%	3.47	3.56	p < 0.05

グループワークへの継続的な高い満足度

- **高い満足度の維持**：「授業でのグループワーク・課題解決型学習に満足している」という設問に対し、同意度は 95.72% と非常に高く、前期（基礎演習A）の 96.6% と比較しても、依然として学生がグループワークを中心とした授業スタイルを肯定的に捉えていることがわかる。
- **他者からの学び**：「他のメンバーの意見から、新たな気づきや学びを得られた」という項目では、肯定的な回答が 94.87% に達しており、協働学習を通じた相互啓発が機能していることが伺える。

前期（基礎演習A）との比較における課題

- **平均値の有意な低下**：ほとんどの項目において、前期（平均値A）よりも今期（平均値B）のスコアが統計的に有意に低下している。特に「役割分担の適切さ」(p < 0.001) や「円滑なコミュニケーション」(p < 0.01) の低下が顕著である。

- **共創への変化に伴う健全な摩擦**：前期と比較して「円滑さ」や「雰囲気」のスコアが低下しているものの、基礎演習AとBではグループワークの位置付けが異なる。前期の基礎演習Aが授業3回のワークで「仲良くなること（関係構築）」「課題解決型学習の導入」に主眼が置かれていたのに対し、後期の基礎演習Bでは「実社会の課題解決」という正解のない難題に取り組んでいる。こうした難易度が高い課題に対して本気で向き合ったからこそ、意見の衝突や役割分担の難しさといった「健全な摩擦」が生じたと解釈でき、FAや教員による介入の質を「調整・解決型のファシリテーション」へと高度化させるための重要な示唆を与えています。
- **ワークの難易度上昇による影響**：前期報告書において「基礎演習Bでは経営学的な分析フレームの提供など、より専門的な関心を引き出す工夫が必要」とされた通り、学習内容の高度化に伴い、グループ運営の難易度が増した可能性が考えられる。前期以上に「計画的な進行」や「役割分担」において課題を感じる学生が増えている（不同意度がそれぞれ約7.5%から9.6%へ増加）点は注視すべきである。
- **主体性の変化**：「主体的に問題解決に取り組む力がついた」という項目のみ、前後比較で有意な差が見られなかった（n.s.）。これは、ワークの難易度が上がった中でも、学生が自律的に取り組もうとする姿勢自体は維持されていることを示唆している。

今後の改善に向けた視点

- **FAによる介入の高度化**：前期報告書でも指摘された通り、グループ内での「計画的な進行」に対する否定的な回答が散見される。今後は、より専門的な課題解決プロセスを支援するためのFAによる具体的なアドバイスが、満足度の回復には不可欠である。

Section.5：課題解決型学習 テーマへの評価

基礎演習Bでは、課題解決型学習の一環として、実際の企業・行政・NPOなどの外部組織・人とのコラボレーションによって与えられた課題が毎年設定される。本年度は東急ホテルズ&リゾーツ株式会社とのコラボレーションによって「10年後の渋谷の姿を描き、国内外の人々が何度も訪れたいと思える街にするために、東急ホテルズがすべきことについて、現在または将来の課題解決の視点を盛り込んで提案せよ。」という課題が設定された。

課題設定の難易度や学習効果が適当であったかを検証すべく、SD法、リッカート法による調査を行った。

難易度

「クラスのテンションで最も近いものを選択してください」という設問に対して「簡単だった：難しかった」のうち6段階で回答を求めた。

	簡単だった					難しかった
今回の課題						
テーマは…… (難易度)	1.07%	1.71%	7.25%	26.44%	42.86%	20.47%

難しかった寄り2段階の合計値は64%近くに達する。「10年後の渋谷の姿」といった時間軸の設定や、ホテルという必ずしも日常生活と結びつかないテーマ設定によって、難しいテーマと評価された可能性が考えられる。

学習効果

課題テーマへの満足度や、学習効果をリッカート法で測定した。

	まったく そう思わない	あまり そう思わない	ややそう思う	とてもそう思う
今回の課題テーマに、満足している。	1.71%	19.66%	53.42%	25.21%
今回の課題テーマは、実社会や経済の動きを学ぶ上で役立つものだった。	1.07%	8.12%	53.85%	36.97%
今回の課題テーマを受けて、社会に対する関心や問題意識が高まった。	1.92%	10.26%	57.05%	30.77%

課題テーマの有用性と社会に対する関心の向上

- 実社会との関連性への高い評価：「実社会や経済の動きを学ぶ上で役立つものだった」という設問に対し、90.82%という極めて高い同意が得られた。東急ホテルズという実在する企業を対象とし、渋谷という身近かつ変貌の激しい街をテーマに据えたことで、学問と実社会の繋がりを強く実感させる効果があったと言える。
- 社会意識の喚起：「社会に対する関心や問題意識が高まった」についても87.82%の学生が同意している。前期の分析報告書では、「経済や経営に関するメディア報道を意識するようになった」の同意

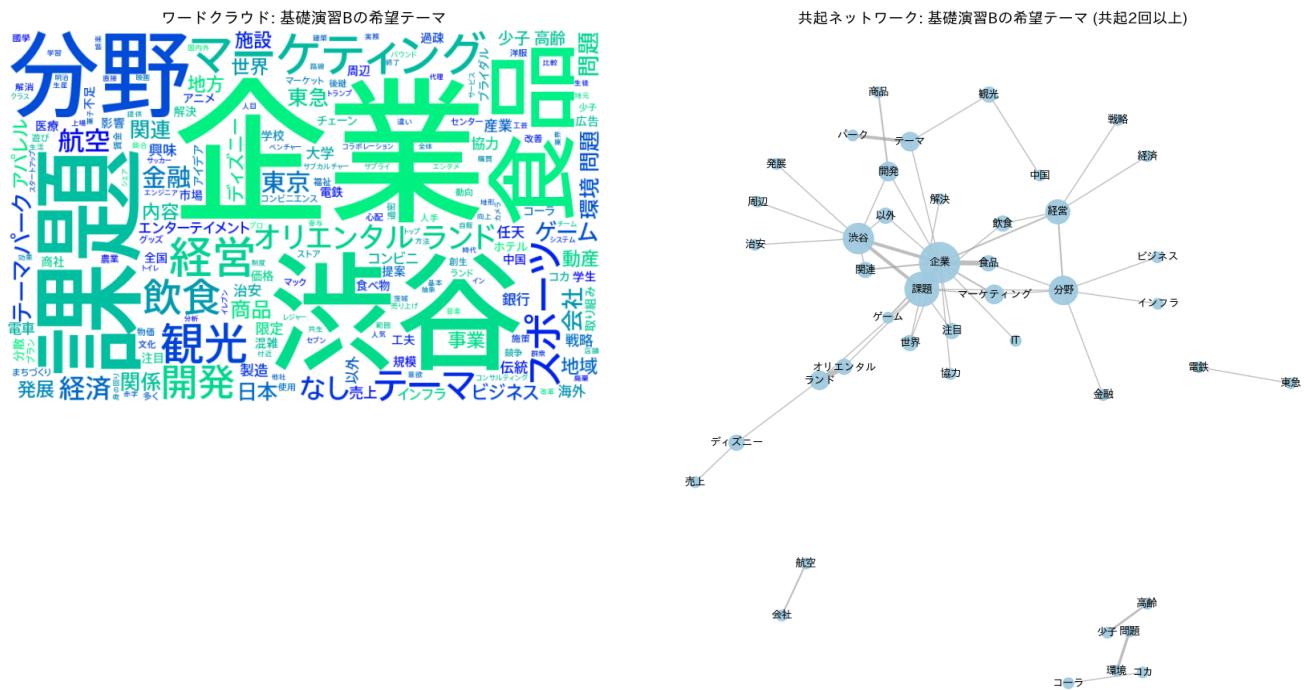
度が76.7%と最も低く、関心の向上が課題として挙げられていた。本課題テーマを通じたPBLの実施は、学生の社会に対する関心を大きく引き出すことに成功しており、前期の課題を克服する成果を上げている。

課題テーマへの満足度

- テーマへの肯定的な受け止め：「今回の課題テーマに、満足している」という設問への同意度は78.63%であった。大多数の学生が満足しているものの、「あまりそう思わない」という回答が19.66%存在している。これは、他の学習効果に関する設問の不同意度（約10%前後）と比較するとやや高い傾向にある。

次年度以降の希望テーマ

来年度以降のテーマ選定の参考要素として「もし来年度のテーマを設定できるとしたら、どのような企業や分野の課題を取り上げてみたいですか？」という設問に対し自由記述で回答を求めた。



自由記述の全体傾向：B2C企業への高い関心

ワードクラウドにおいて最も大きく表示されているのは、「飲食店」「アパレル」「エンタメ」「SNS」といった、学生にとって生活に身近なB2C（消費者向け）企業やサービスに関する語句である。

- ・ **身近な消費対象への関心**：今回のテーマであった「東急ホテルズ（渋谷）」と同様に、自分が普段利

用している、あるいはイメージが湧きやすい業界を通じて経済の仕組みを学びたいという欲求が強く表れている。

- **特定の企業名の挙出**：「スターバックス」「任天堂」「ユニクロ」「ディズニー・オリエンタルランド」など、具体的な企業名を挙げる回答も多く、学生のブランド認知度がテーマへの没入感に直結していることが示唆される。

要望カテゴリーの分類

自由記述の内容は、大きく以下の3つのカテゴリーに分類される。

カテゴリー	主なキーワード	学生の意図
身近な生活・消費	飲食店、コンビニ、ファッショニ、ゲーム	興味のある分野であれば、難しい課題でも主体的に取り組めると考えている。
先端技術・トレンド	AI、DX、IT企業、メタバース	社会の変革期における最新のビジネスモデルに対する知的好奇心。
社会課題・地域貢献	地方創生、環境問題、少子高齢化、SDGs	企業の利益追求だけでなく、社会的な価値創造について考えたいという意識。

考察：学習意欲と専門分野への橋渡し

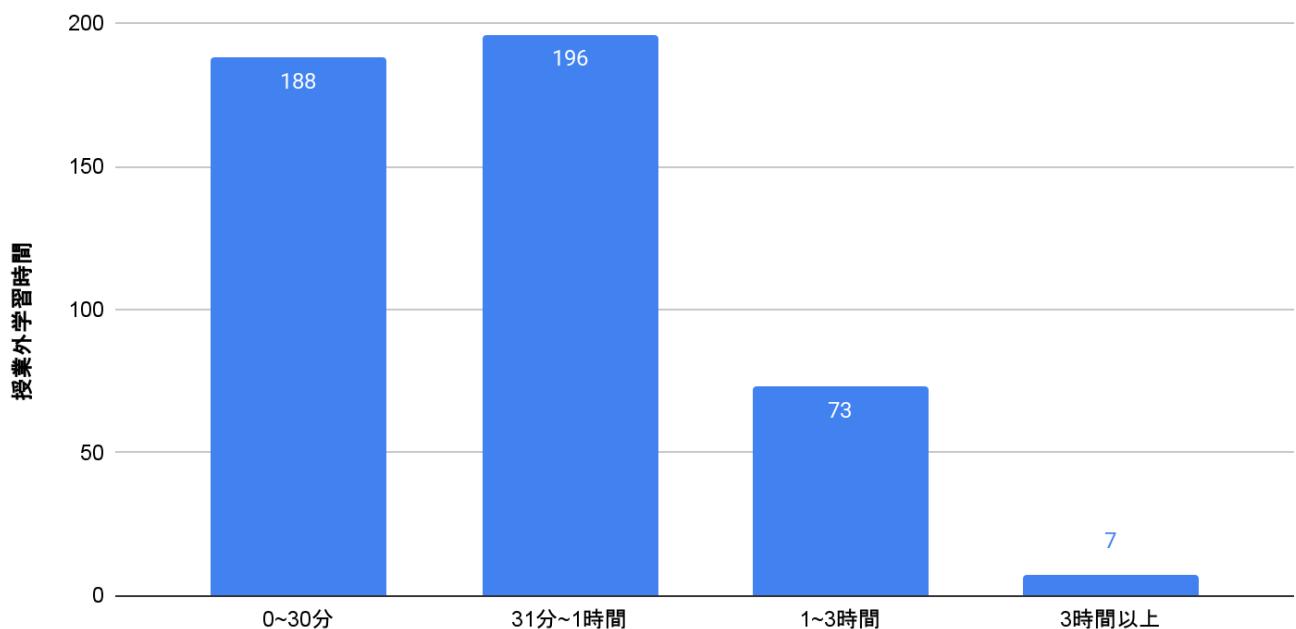
前期の「基礎演習A」の分析では、「経済や経営に関するメディア報道を意識するようになった」という同意度が76.7%と低く、学問への関心をいかに引き出すかが課題として挙げられていた。

- **関心の深化に向けた示唆**：今回の自由記述で多く見られた「身近な企業」をテーマに据えることは、前期からの課題である「勉強する意欲」や「経済・経営分野への関心」を高めるための有効なツクとなる。
- **専門的視点の導入**：単に「好きなもの」を扱うだけでなく、学生が挙げた「IT」や「社会課題」といったキーワードを、経済学・経営学の分析フレームワーク（統計資料の参照や経営戦略論など）と組み合わせることで、より深い学びへと導くテーマ設定が求められる。

Section.6：授業準備時間

以下は、「基礎演習Bの授業準備に費やす時間は、平均すると1回あたりどれくらいでしたか。該当するものを1つ選択してください。」という設問において、0～30分、31分～1時間、1～3時間、3時間以上のいずれかから選択してもらったものを集計したものである。

授業外学習時間



基礎演習Aでは最多を占めていた選択肢が「0~30分」であったが、今回基礎演習Bでは最も人数が多いのは「31分~1時間」で196人。次に多い「0~30分」の188人となっている。課題解決型学習によって授業外の発表準備、打ち合わせ等の要因により学習時間が長くなっていると推測できる。

Section.7：積極性スコア

調査の背景と目的

基礎演習Aでの調査結果の要約

前学期に実施された「基礎演習A」の授業評価アンケート分析において、学生の「積極性スコア⁶」は入学時（平均59.7点）から学期末（平均70.5点）にかけて全体として向上傾向にあることが確認された。

しかし、個別の変化量に着目すると、スコアが改善した学生と、変化なし・あるいは悪化している学生が半々近くに分かれる結果となった。また、統計的検定の結果、積極性スコアの改善と授業満足度の間には有意な相関 ($p < 0.05$) が認められたものの、なぜ一部の学生で積極性が低下してしまったのか、その具体的な要因までは特定に至らなかった。

⁶ 基礎演習A・Bのいずれの調査においても設問文では「大学生活への積極性をお伺いします。」「【時点】の積極性を点数で表すとしたら何点ですか？」という記述をしており、基礎演習に対する積極性ではなく、大学生活に対する積極性を調査したものであることに留意されたい。

基礎演習Bにおける調査設計

上記の課題を踏まえ、本学期「基礎演習B」では、より詳細な変容プロセスと要因を捉えるため、以下の2点の改善を行った。

第一に、期間中の推移をより詳細に把握するため、三時点での調査を実施した。

第二に、変化要因を特定するため、「これらの積極性の変化についての原因を教えてください」という自己記述項目を新たに設け、数値の変化だけでなく、学生自身の認識に基づいた質的な変化要因の解明を試みた。

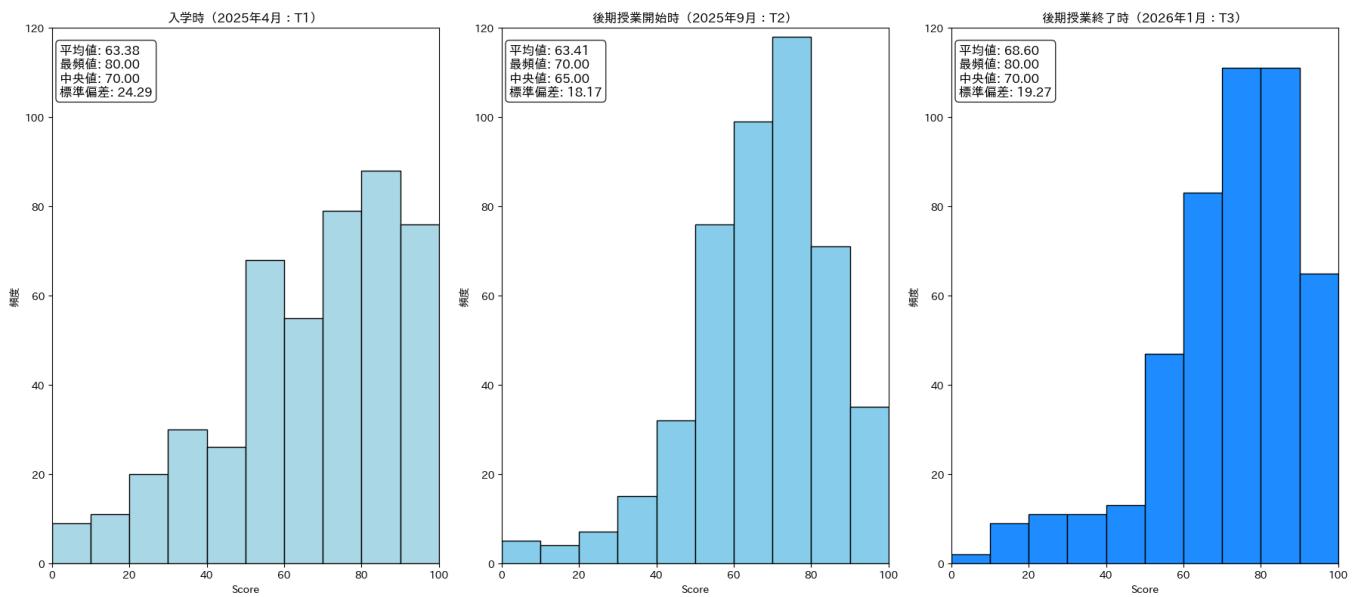
以下、これらの調査に基づき積極性の変容とその要因について分析を行う。

積極性スコアの推移と要因分析

時系列による「大学生活への積極性」の全体推移

学生が自己評価した「大学生活に対する積極性」の変動を把握するため、入学時（2025年4月：T1）、後期授業開始時（2025年9月：T2）、後期授業終了時（2026年1月：T3）の3時点において測定を行った。

- **停滞期（T1→T2）**：入学時（63.38点）から後期開始時（63.41点）にかけてのスコア変動は極めて小さく、有意差も見られなかった。夏休み期間を挟んだことで、入学当初の緊張感や高揚感が薄れる一方、新たな活動への意欲もまだ喚起されていない、大学生活全体における「停滞」の状態にあったと推察される。
- **上昇期（T2→T3）**：一方で、後期授業終了時には平均68.60点と、開始時から約5ポイントの大幅な上昇が確認された（ $p < 0.001$ ）。この期間は基礎演習Bの主要カリキュラムである「課題解決型プロジェクト」が実施された時期と重なる。授業内の活動が、学生の大学生活全体に対する向き合い方にポジティブな影響を与え、停滞していた積極性を再点火させたことが示唆される。



変動パターンの類型化と特徴

スコア推移を追跡し、大学生活への積極性の変容パターンは以下の4つのクラスターに分類した。

- **継続上昇型 (55.7%) :**

入学時から一貫してスコアを維持・向上させた層であり、全体の過半数を占める。この層は大学生活への適応が順調であり、講義や課外活動を含めた大学での生活全般に対し、意欲的に取り組めていると言える。

- **V字回復型 (17.2%) :**

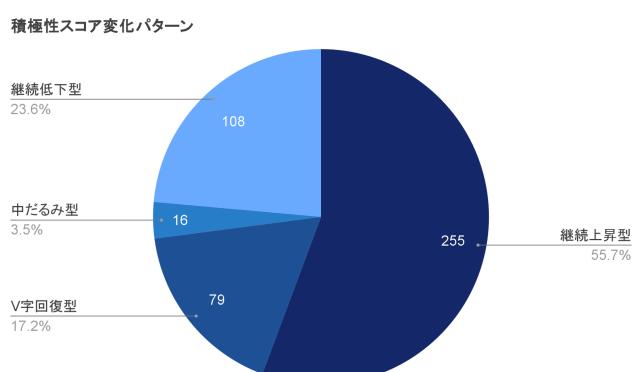
入学時から後期開始時にかけて一時的に大学生活への積極性が低下したものの、後期終了時に向けてスコアを回復させた層である。この17.2%の学生にとって、基礎演習Bという場が、中だるみしかけていた大学生活のモチベーションを立て直す「再起の機会」として機能した可能性が考えられる。

- **継続低下型 (23.6%) :**

入学時よりスコアが低下し続けている、あるいは維持後に低下した層であり、全体の約4分の1を占める。大学生活への慣れとともに意欲が減退しており、授業内での介入だけでは生活全般のモチベーション低下を食い止められなかった層である。

- **中だるみ型 (3.5%) :**

後期開始時に一時的な上昇を見せたものの、終了時に向けて失速した少数派である。個別の事情や生活リズムの乱れなどが影響している可能性がある。



自由記述に基づく要因の詳細分析

「積極性の変化についての原因」に関する自由記述を分析し、大学生活への積極性がなぜ変動したのか、その背景を探った。

上昇要因：充実した活動と自己効力感

スコア上昇群（継続上昇型・V字回復型）の記述には、「グループワーク」「友達」「楽しい」「プレゼン」といった語句が強く共起している。

- **関係性の中での充実感**：「グループワークが楽しかった」「クラスの友達ができた」という記述は、授業を通じて形成された人間関係が、大学生活そのものを楽しく充実したものに変えていることを示している。
- **活動を通じた自信の獲得**：「大プロ（大プロジェクト）」や「プレゼン」の完遂といった具体的な成果が、「自分はできる」という自己効力感を高め、それが大学生活全体への前向きな姿勢（積極性）へと還元されている。

低下要因：「慣れ」による弛緩と生活習慣

スコア低下群（継続低下型）の記述では、「慣れ」「怠惰」「生活」「眠い」といった語句が特徴的である。

- **「慣れ」の負の側面**：多くの学生が「大学生活に慣れてしまった」ことを低下の理由に挙げている。環境への適応が進んだ反面、入学当初のフレッシュな緊張感が失われ、生活全体がマンネリ化・ルーティン化している様子がうかがえる。
- **生活リズムと優先順位の変化**：「1限」「朝起きられない」といった生活習慣の乱れに関する記述が散見される。また、サークルやアルバイトなど課外活動への比重が高まった結果、学業を含む大学生活全体へのエネルギー配分が変化し、相対的に「積極性」の自己評価が下がっている側面も見受けられた。

考察と今後の課題

本調査の結果、約7割の学生（上昇型・回復型）は、1年間を通じて大学生活全体への積極性を維持・向上させていることが明らかになった。特に、授業内での協働やプロジェクト活動が、学生の大学生活にハリを与え、主体性を引き出す重要な要素となっている。

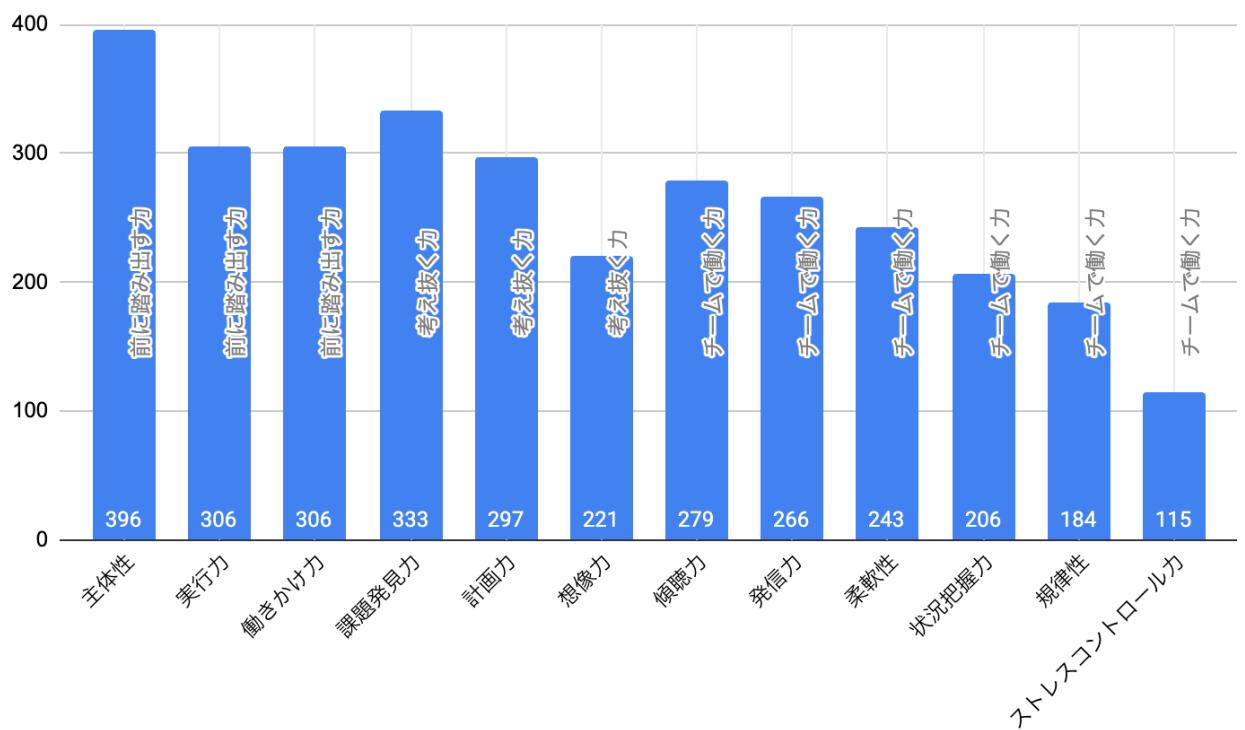
一方で、約4分の1の学生が陥っている「継続低下型」への対策は課題である。彼らの積極性低下は、単に授業への不満ではなく、「大学生活への慣れ」や「生活習慣の乱れ」という、より広範な生活背景に起因している。

したがって、今後の基礎演習の授業運営に着目すると、単に教室内の活動を充実させるだけでなく、大学生活全体のマンネリを打破するような仕掛けが求められる。例えば、学外と連携したリアリティのある課題設定や、他流試合のような「今のままでは通用しない」と感じさせる適度なストレス（刺激）を与えることで、安定してしまった大学生活に新たな風を吹き込むことが、積極性の維持・向上に不可欠であると考えられる。

Section.8：社会人基礎力との授業関連度

以下は「次の能力の中で、授業内容と関係すると感じたものをすべて選択してください（複数回答可）。」との設問にて得られた回答を集計したものである。

社会人基礎力との授業関連度



- 最も関連度が高い能力**：最も授業との関連度が高いと見なされている項目は「主体性」であり、回答数は396と突出している。これは前期（基礎演習A）の358をさらに上回る結果であり、通年での授業を通じて、学生が自発的に行動する姿勢がより強固に形成されたことを示唆している。
- プロジェクト型学習の影響が顕著な項目**：「主体性」に次いで、「課題発見力」（333）、「実行力」（306）、「働きかけ力」（306）、「計画力」（297）といった能力が高い評価を得ている。前期の分析結果では「傾聴力」や「計画力」が上位であったが、後期（基礎演習B）では「課題発見力」や「実行力」「働きかけ力」のスコアが顕著に伸びている点が特徴的である。これは、実社会の

具体的な課題解決に取り組むプロジェクト活動を通じて、現状を分析し、周囲を巻き込みながら目的を達成する実戦的な能力が求められた結果であると考えられる。

- **関連度が低い能力**：一方で、授業との関連性が低いと見なされている能力は、前期と同様に「ストレスコントロール力」（115）が最も低く、次いで「規律性」（184）、「状況把握力」（206）となつた。これらの項目は、前期の結果と比較するとスコア自体は上昇しているものの、依然として授業内での直接的な育成実感には結びつきにくい側面があると言える。特にグループワークにおける対立やプレッシャーの管理（ストレスコントロール力）といった観点において、今後どのように授業内で意識付けを行うかが引き続きの課題である。

Section.9：FAの授業への貢献

以下は「FAのアドバイスやサポートは、具体的にどのような側面で役立ちましたか（当てはまるものすべてを選んでください）。」との設問にて得られた回答を集計したものである。

FAの授業への貢献

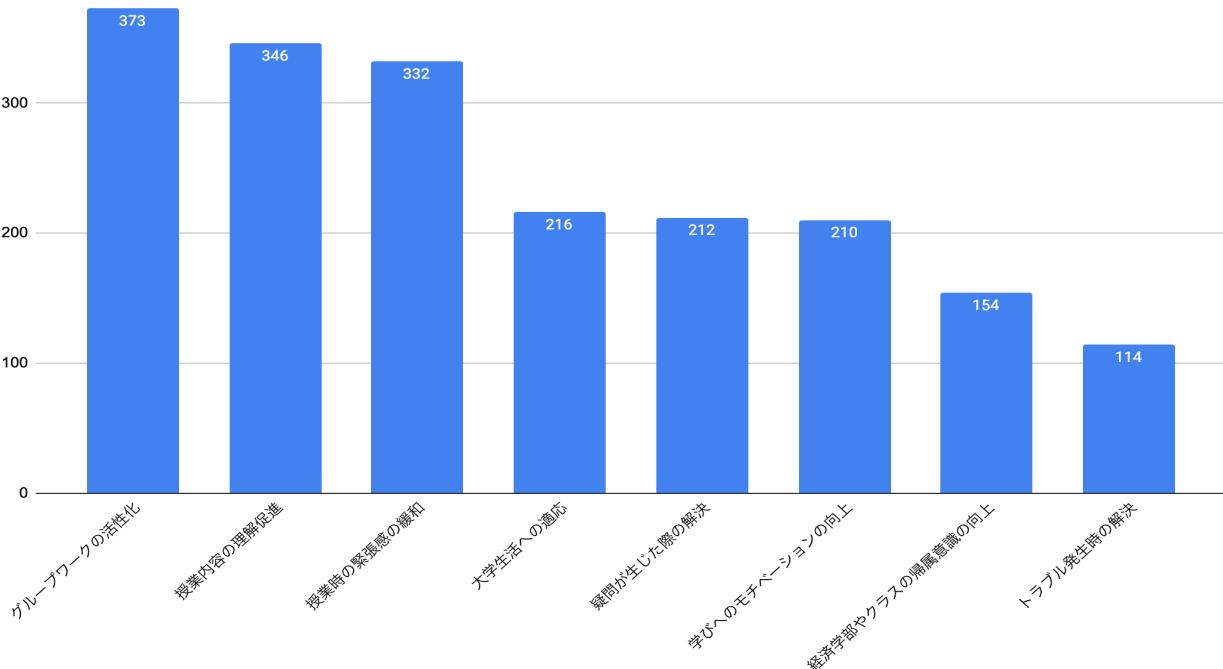
400

300

200

100

0



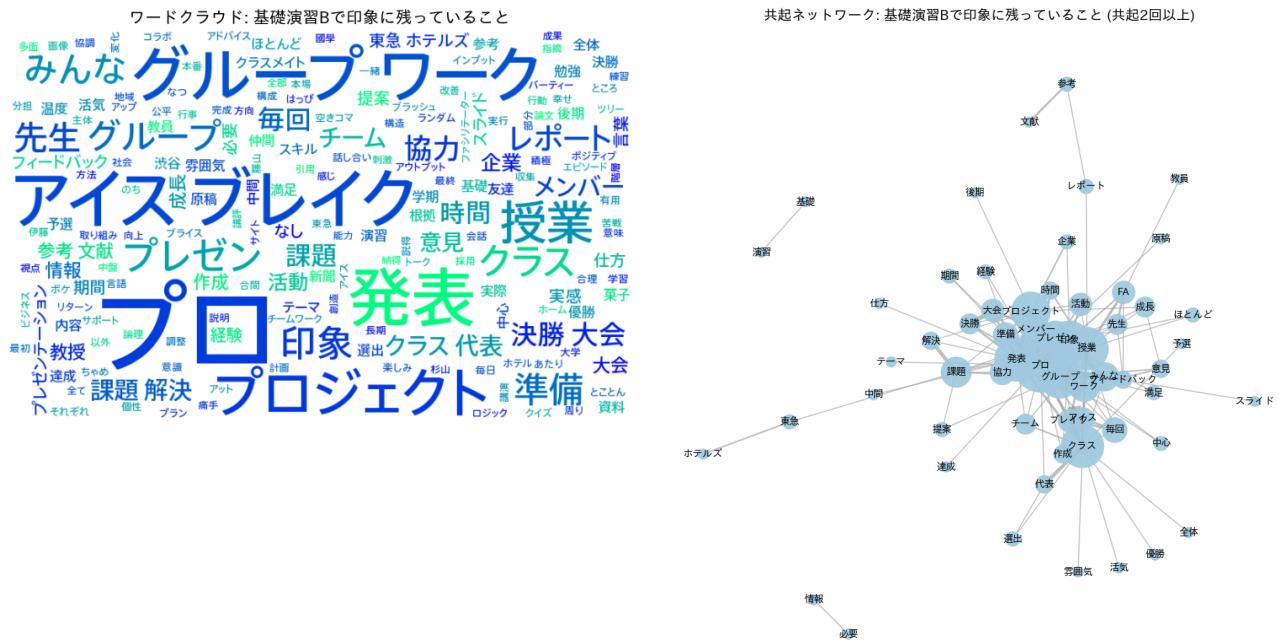
- **グループワークの活性化への多大な貢献**：最も回答が多かった項目は「グループワークの活性化」であり、373件の支持を得ている。これは、基礎演習Aの分析（323件）と比較しても高い数値であり、グループワークを中心としたアクティブラーニング形式の授業において、FAが円滑なコミュニケーションを促進する「ファシリテーター」としての役割を極めて効果的に果たしていることを示している。

- **学習支援と環境整備の質**：次いで「授業内容の理解促進」（346件）、「授業時の緊張感の緩和」（332件）が続いている。学習内容の補足説明や、学生が発言しやすい雰囲気作りにも大きく寄与している。特に「授業時の緊張感の緩和」は、学生がリラックスしてワークに取り組むための土台となっており、これが「授業内容の理解促進」という学習効果にもつながっていると考えられる。
 - **実務的な課題解決能力の表出**：今回の分析では、新たに「疑問が生じた際の解決」（212件）や「トラブル発生時の解決」（114件）といった項目も、一定の支持を得ていることが確認された。これらは、ワークの進行中に生じる具体的な不明点や、グループ内のトラブルに対して、FAが伴走者として即座に介入・支援を行っている実態を裏付けるものである。
 - **今後の課題**：所属意識とモチベーションの向上：一方で、「大学生活への適応」（216件）や「学びへのモチベーションの向上」（210件）は、上記の上位3項目に比べると回答数が低くなっている。特に「経済学部やクラスの帰属意識の向上」（154件）は最も低い数値となっており、これは基礎演習Aの報告書でも指摘されていた「学部全体や専門分野への興味・関心の引き出し」という課題が継続していることを示唆している。

Section.10：自由記述

分析の最後に、自由記述欄に寄せられた回答を取り上げる。

基礎演習Bの授業で印象に残っていること



大プロジェクト（大プロ）とプレゼンテーション

- **実践的な課題解決**：企業（東急ホテルズ）からの実課題に対し、班で協力して提案をまとめ上げるプロセスが大きな経験となっている。「社会における企業のあり方や創造性を身につけられた」「企業へのリターンを考える貴重な経験だった」といった、実社会を意識した学びへの言及が目立つ。
- **達成感と成長**：授業時間外にグループで集まり準備を重ねたことや、決勝大会・クラス代表選出といった競争的要素が、強い達成感と自己成長の実感に繋がっている。「自分でもここまでできると思わなかった」「他班の発表を聞いて改善点に気づけた」など、相互評価を通じた成長も確認できる。

グループワークとコミュニケーション

- **対人スキルの向上**：「こんなに人と話せるようになるとは思っていなかった」「意見の合わない人とも協力して頑張った」など、多様な他者との協働を通じたコミュニケーション能力の向上が見られる。
- **コミュニティ形成**：1年を通じた固定メンバーでの活動や、アットホームなクラスの雰囲気により、「多くの友達ができた」という回答も多い。

アイスブレイクによる心理的安全性の構築

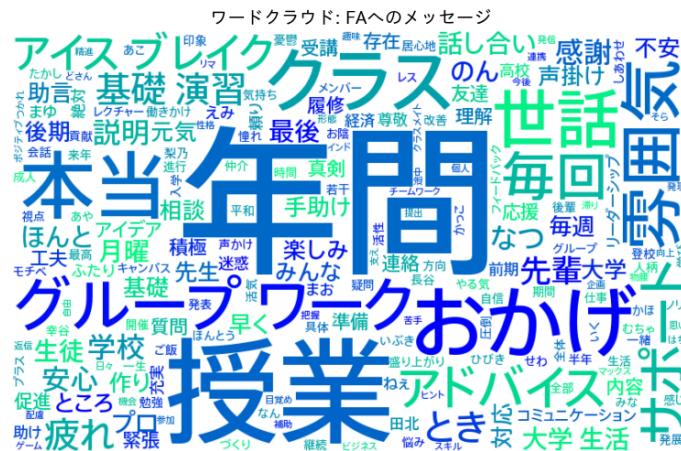
- **アイスブレイクへの肯定評価**：「毎回のユニークな内容が楽しみだった」「アイスブレイクのおかげでクラス全体が仲良くなれた」といった声が多く、これが発言しやすい土壌を作り、グループワークの質を高める要因となっている。

アカデミックスキルと指導体制

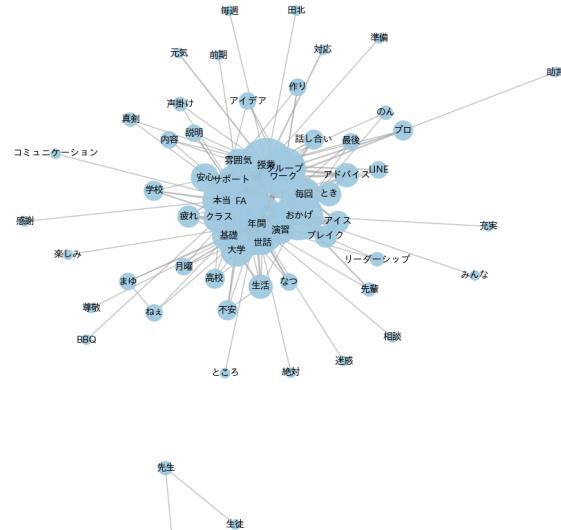
- **スキルの修得**：レポートの書き方、参考文献の引用方法、MECEやロジックツリーといった論理的思考法が「非常に参考になった」「他では教われないことだった」と実用面で高く評価されている。
- **教員・FAによるサポート**：教員やFA（ファシリテーター）の明るい雰囲気や、的確なフィードバックが、プロジェクトのブラッシュアップやモチベーション維持に貢献している。特に「行き詰った時にFAがサポートしてくれた」といった、伴走型の指導体制への感謝が散見される。

FAに対するメッセージ

回答の分類と概要



共起ネットワーク: FAへのメッセージ(共起2回以上)



寄せられたメッセージは、大きく以下の3つのカテゴリーに分類できる。

- グループワークの円滑化と学習支援
 - 議論が滞った際のアドバイスやヒントの提示
 - 難しい内容を学生目線で噛み砕いた解説
 - 具体的なフィードバックやプレゼン準備への助言
 - クラスの雰囲気作りと心理的安全性
 - アイスブレイクを通じた交流の活性化
 - 親しみやすく相談しやすい雰囲気の維持
 - 授業内の緊張緩和と、学生間の仲介役としての立ち回り
 - 通学・学習モチベーションの維持
 - 月曜1限という厳しい時間帯における出席意欲の向上
 - 大学生活全般（履修相談や生活）への不安解消
 - FAの姿を見て「自分も将来FAになりたい」という憧れや目標の形成

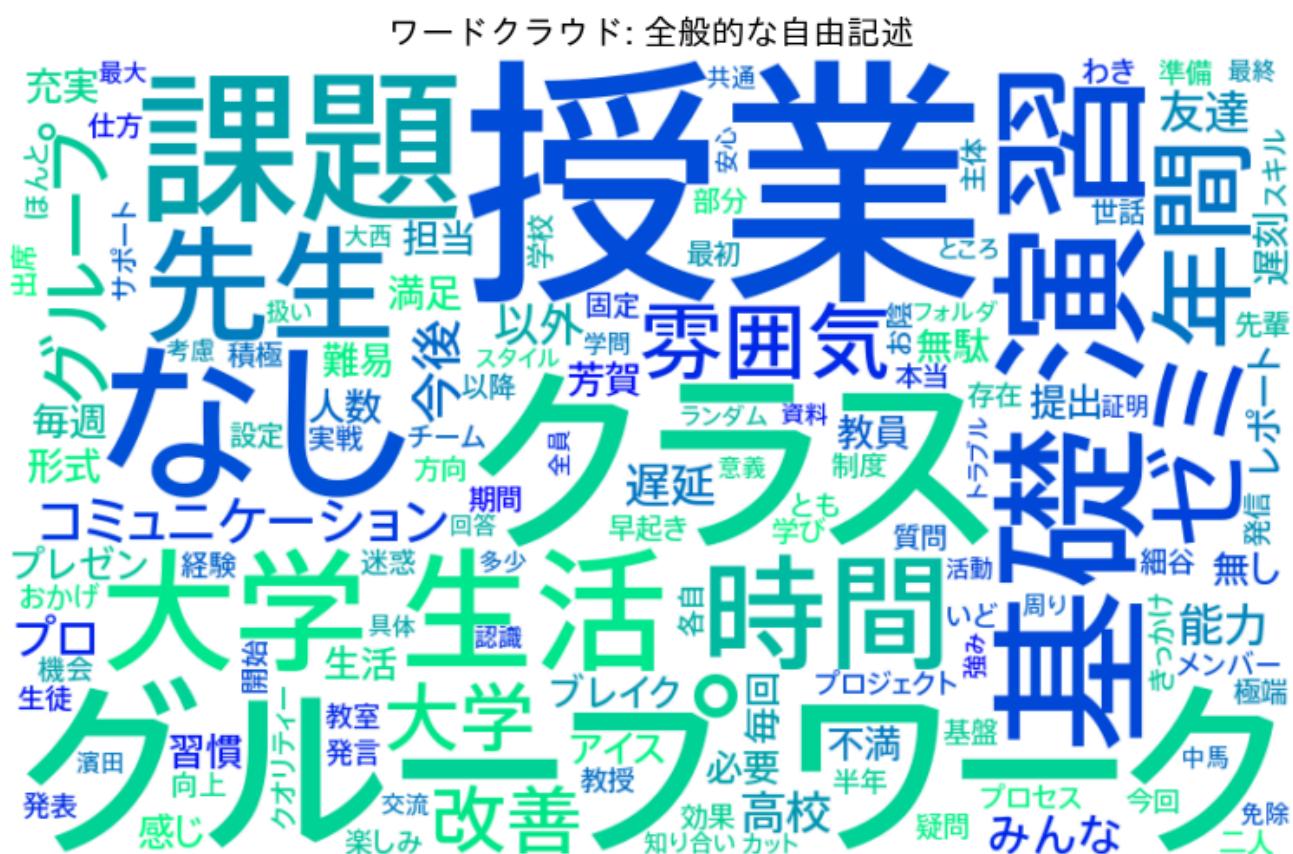
主な記述内容

受講生からの代表的な声は以下の通りである。

- **学習支援について**：「グループワークで行き詰った時に、新しい視点からのアイデアを助言してくれたことで、プロジェクトの内容をさらに発展させることができた」、「難しい内容を私たちが理解できるように説明してくれたおかげで、安心して取り組めた」。

- 雰囲気作りについて：「クラスが静かな時でも明るく盛り上げてくれた」，「アイスブレイクが毎回楽しみで、おかげでクラスメイトと早く打ち解けることができた」。
 - 精神的な支えについて：「大学生活の1年目で不安が多かったが、親身に話を聞いてくれた」，「1限の授業で朝が辛かったが、FAの方に会えると思うと頑張って登校できた」。
 - 将来への影響：「FAの方のように、コミュニケーション能力が高く、他者を支えられる人になりたいと思った」。

自由記述（基礎演習Bに対する感想・意見・要望）



授業内容・進め方に関する評価

【良かった点・成果】

- **グループワークによるスキル向上**：プレゼン力、発信力、チームコミュニケーション力など、高校までの授業では養いにくい能力を実践形式で学べたという意見が多く見られた。
 - **大学生活への適応**：レポートの書き方や提出物のルールなど、大学生活の基盤となるスキルを習得でき、この授業が学校に慣れるきっかけになったと評価されている。
 - **友人づくりと雰囲気**：少人数制でグループワークが多いため、クラスメイトと仲良くなりやすく、明るく活気のある雰囲気で受講できたという声が目立つ。

- FA（学生アシスタント）の存在：FAのサポートにより、クラスの雰囲気が明るくなり、充実した時間を過ごせたという高い評価が寄せられている。

【改善・要望】

- プロジェクトの自由度と時間配分：プロジェクトの進め方が固定されている点への疑問や、課題の難易度に対して取り組む時間が不足しているという指摘があった。1年を通して同じ課題に取り組みたいという提案も見られる。
- クラス間格差の是正：担当教員によって課題の難易度、評価制度、授業の進め方に大きな差があることに不満を感じている学生が一定数存在する。
- グループ編成：全員と一度は同じグループになれるような工夫を求める声があった。

運用・環境面に関する評価

- 1限実施への負担：「1限でなければもっと良かった」「1限は辛い」といった、開始時間の変更を望む声が多く寄せられている。一方で、1限があることで生活習慣が整ったという肯定的な意見も一部にあった。
- 出席・遅延の取り扱い：鉄道の遅延証明書が考慮されない点や、出席管理の厳しさに対する改善要望が複数挙げられている。
- システム面：課題提出用フォルダのトラブルなど、K-SMAPYII運用に関する指摘もあった。

今後に向けて

本授業評価アンケートプロジェクトの改善

本年度は、FAが主体となり調査設計から分析までを行う初めての試みとして、基礎演習A・Bを通じた授業評価アンケートを実施した。この新たな取り組みを通じて得られた知見に基づき、次年度以降の本プロジェクトにおける改善点を以下の通り提言する。

調査実施方法の定着と回答率の確保

本調査では、授業時間内に回答時間を設けたことにより、基礎演習Bにおいて86.1%という高い有効回答率を達成し、クラスごとの回答数の偏りも最小限に抑えることができた。高い回答率は分析結果の代表性と信頼性を担保する基盤であるため、次年度以降も「授業内実施」を原則とし、学生の負担を考慮した適切なタイミングでの実施を継続すべきである。

通年データの比較分析と分析フローの自動化

本報告書では、基礎演習A・Bで共通の質問項目を設けたことにより、同一学年における意識変容や能力向上の推移を定量的に把握することができた。この観測は教育効果の可視化において極めて有効であった。今後は、経年変化（年度ごとの比較）も視野に入れ、データの蓄積を行う必要がある。その際、集計・可視化・レポーティングの一連の作業コストを削減するための分析パイプライン（データフロー）と分析の人的リソースを確保し、持続可能な分析体制を整えることが望まれる。

クラス特性や属性を考慮した多層的な分析

今回の分析では、全受講生を均質な母集団として扱ったが、実際には担当教員やFAによってクラス運営のスタイル（働きかけの主体、自由度、対話の頻度など）は異なる。現状の「全体分析」に加え、今後はクラスごとの特性や教授法といった「環境要因」を説明変数として追加し分析することで、「どのような授業環境が、学生のどの能力（主体性や満足度）に寄与するのか」という因果関係にまで踏み込んだ、より強固なリサーチが可能になると考えられる。

データドリブンな授業・FA活動改善（PDCA）の確立

本アンケートの最終目的は、分析報告書の作成そのものではなく、得られた知見を教育現場へ還元することにある。データの分析結果を、FAの研修会や定例ミーティングにおいて共有し、FA個人のスキルアップや組織全体の運営指針に反映させるサイクル（PDCA）を確立することで、より一層の教育効果向上が期待できる。

FAによる自己評価の導入と認識ギャップの分析

現在の評価制度は受講生からの他者評価に依存しているが、教育支援の質をさらに高めるためには、支援を提供するFA自身の自己認識との照合が不可欠である。次年度以降、FAに対しても自身のクラス運営や関わり方を問う「自己評価アンケート」を実施し、受講生からの評価との「認識のズレ（ギャップ）」を定量的に可視化することを提案する。

FAが「十分に支援できた」と認識している項目と、受講生の実感値に乖離がある場合、そこにはコミュニケーションの不全や意図の不一致が潜んでいる可能性がある。このギャップを分析し、個々のFAへのフィードバックや全体研修の重点項目として扱うことで、FAのメタ認知能力（自身を客観視する力）を養い、より受講生のニーズに即したファシリテーションを実現できると考えられる。

基礎演習A・B授業の改善の観点から

2025年度の通年でのアンケート結果およびシラバスで掲げる授業設計を照合し、次年度以降の「基礎演習A」「基礎演習B」全体の質的向上に向けた改善案を以下の4つの観点から提示する。

「大学生活への慣れ」によるマンネリ化の打破と動機づけ

前期・後期の比較分析において顕著であったのは、学生の「積極性」や「学習意欲」の二極化である。前期終了時点では大学生活への適応が進んだ一方で「学習意欲の伸び悩み」が課題とされた。後期の結果では、PBL（課題解決型学習）の導入の影響もあってか「V字回復」を見せた学生層がいる一方で、約4分の1の学生が「継続低下型」に分類され、その主要因として「大学生活への慣れ」や「怠惰」が挙げられた。シラバスにおいて本授業は「主体性・協働性」の涵養を目標に掲げているが、単に授業回数をこなすだけでは、環境に慣れてしまった学生の再活性化は困難である。この中だるみを打破するためには、後期（基礎演習B）の早い段階で、学内の評価だけでなく「外部の目」を意識させる仕掛けが必要である。具体的には、クラス代表選出やプレゼン大会といった競争的要素の意識づけや、可能であれば他クラスとの合同中間発表（他流試合）を導入したりすることで、クラス内の関係性に適度な緊張感（適度なストレス）を与える設計が有効に働く可能性がある。またFA・教員によるプッシュ型の支援として授業や出席の様子を見て、「困っていることはないか」といったコミュニケーションを重点的に取ることによって大学への関心を繋ぎ止めるといった施策も必要であろう。

「身近な関心」から「専門的な経済学」への橋渡しの強化

基礎演習Bでは「2年生の専門演習（ゼミ）への応募意欲」が有意に向上し、シラバスにある「専門教育へ誘導する取り組み」は一定の成果を上げた。しかし、「経済学部が好きになった」等の帰属意識スコアは前期より低下しており、学生の関心は「B2C企業や身近なサービス」に留まり、学問としての「経済学」への昇華には課題が残る。

次年度のテーマ設定や指導においては、学生が好む身近な課題を取り口としつつも、その解決策の立案プロセスにおいて「経済・経営学的な分析フレームワーク」や「統計データの活用」を評価基準として組み込むことにより、より学問的な関心を喚起できる可能性がある。「なんとなく面白そうなアイデア」で終わらせらず、シラバスにある「根拠をもって説明し、相手に伝える」という到達目標を、経済学的なエビデンスベースで達成させるよう、FAおよび教員が指導の目線を上げることが、経済学部への知的好奇心を高める鍵となる。

クラス間格差の是正と評価基準の透明化

自由記述において、担当教員による課題の難易度や授業進行、評価基準の差に対する指摘が見られた。基礎演習は必修科目であり、全クラスで「基礎的学修スキル（スタディスキル）」の修得水準を均質化することが求められる。教員の裁量は尊重しつつも、特に後期の大プロジェクト（PBL）に関しては、レポートやプレゼンテーションの評価ルーブリック（採点基準表）を共通化し、学生に事前に明示することが望ましい。学生が言わばクラスガチャ（配属されたクラスによる不公平感）を感じることなく、納得感を持って学習に取り組める環境を整備する必要がある。

FAの役割変化に対応した育成プログラムの再編

通年で極めて高い評価を得ているFA制度であるが、前期と後期では求められる役割が質的に変化していることが確認された。前期は「アイスブレイク」や「話しやすい雰囲気作り」が重視されたのに対し、後期では「議論が行き詰った時の解決」や「トラブル対応」といった、より高度なファシリテーション能力が評価されている。したがって、FAの研修体制においても、前期は「チームビルディング・傾聴」に重点を置き、後期に向けては「プロジェクトマネジメント・対立解消（コンフリクト・マネジメント）」にフォーカスするといった、授業側の需要に応じたプログラムを導入すべきである。これにより、FA自身の成長実感も高まり、結果として受講生への支援の質がさらに向上すると考えられる。

謝辞

本授業評価アンケートプロジェクトの遂行にあたり、多くの方々から多大なるご支援とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

- **分析手法およびレポーティングへのご助言**：データ分析の進め方や、結果を効果的に伝えるためのレポートについて、専門的な知見からご助言をいただきました芳賀英明先生に、厚く御礼申し上げます。
- **調査票の設計協力**：学生の変容をより精緻に捉えるための調査票設計において、建設的な議論と協力をいただいたFA9期の曾我友貴氏に、心より感謝します。
- **調査実施へのご協力**：貴重な授業時間を割いてアンケートの実施にご協力いただいた基礎演習の先生方、ならびに現場で学生への丁寧な働きかけを行っていただいたFA11期の皆様の支えなくしては、これほど高い回収率を達成し、有意義なデータを収集することはできませんでした。
- **受講生の皆様へ**：そして何より、多忙な学期末に本アンケートに回答し、率直な意見や熱意あるメッセージを寄せてくれた受講生の皆さんに感謝します。皆さんの声は、基礎演習という場をより良くしていくための、重要な財産です。